*The Great Gatsby*におけるアナクロニズム

千代田　夏夫 *

（2018 年 10 月 23 日　受理）

Anachronism in *The Great Gatsby*

CHIYODA Natsuo

要約

F・スコット・フィッツジェラルド（F. Scott Fitzgerald, 1896-1940）はアメリカ史を含む〈歴史〉に深い関心を有し、自らの創作活動の糧としていた。本稿では代表作『グレート･ギャツビー』（*The Great Gatsby*, 1925）に現われる〈パストラル〉のイメージに注目しながら、レオ・マークス（Leo Marx,1919-）が主著 *The Machine in the Garden*（1964）で論じたようなアメリカ文学における田園主義の系譜をフィッツジェラルドにも確認しつつ、第一次世界大戦への従軍を希望しつつ叶えられなかった作家が、その劣等感ゆえにアナクロニズムを生じさせながら、ローマ古典にも通じるパストラリズムを表出させた次第を、『ギャツビー』中に現われる人種主義言説や大衆小説にも触れながら、論証する。

キーワード：F・スコット・フィッツジェラルド、アメリカ文学、パストラリズム

はじめに

F・スコット・フィッツジェラルドが 1920 年代の「年代記記者（chronicler）」（Briggs 226）であったとは多く言われるところであるが､彼は 1920 年代のみにとどまらず「アメリカの歴史」「アメリカの過去」（Barbour 71-72）に多大の関心を有していた。リーハンも作家について個人的悲劇と歴史的悲劇の一対一の対応を信じていたと述べるように、フィッツジェラルドは強い歴史感覚を有し、「文学外の何物よりも歴史を読み込んでいた」（Moreland 125）のである。

西洋文明において文明という概念をあらためて問わざるを得ないほどの衝撃を与えた第一次世界大戦であったが、その勃発時に青年期を送り、実際の従軍の叶わないまま戦後の繁栄時

* 鹿児島大学 法文教育学域 教育学系　准教授

代に作家デビューを果たしたフィッツジェラルドにおいては、戦争をめぐるその劣等感は、種々のアナクロニズムというかたちで表出する。

本稿ではフロンティア・ラインの消滅と第一次世界大戦という二大歴史事項を背景に、作家が生じさせざるを得なかったアナクロニズムについて『グレート・ギャツビー』（*The Great Gatsby*, 1925）をテクストに検証する。特に注目するのは、レオ・マークス（Leo Marx, 1919-）が古典的著作 *The Machine in the Garden: technology and the Pastoral Ideal in America*（1964）において論じたような、アメリカ文学に脈々と流れる「田園主義（pastoralism）」の表出である。

1．ジェファソンとパストラリズム

『ギャツビー』を貫くテーマである過去への憧憬は “Can’t repeat the past?” “Why of course you can!”（116）のギャツビーの言に端的である。実際に 5 年前を繰り返すという時系列逆行の試みによって具現化されるこの〈過去への憧憬〉はまた、ヴァージルの『牧歌』や『農耕詩』に見られるように、「黄金時代（the Golden Age）」への憧憬としてローマ古典から貫かれる西欧文藝の王道のテーマである。

『ギャツビー』におけるクロノロジーの諸問題についてはペンドルトンや平石の研究に詳しいが、ペンドルトンの書名も示す、ギャツビーが語り手ニック宅の置時計を危うく壊しそうになる 5 章の有名な個所は、ギャツビーが意図的に時間を支配するクロノスたらんとしていたことをもまた示すものではないか。クロノスはローマ神話ではサトゥルヌス、すなわち農耕をつかさどる神であり、農耕詩、牧歌の拠り所である。アメリカ文学に脈々と流れるパストラリズムの志向、その源泉として「ヴァージルの『牧歌』は、西欧文学における田園詩の系譜の真の源泉である」（Marx 19）ことに充分に留意したい。

アメリカのパストラリズムにおいて大きな位置を占める第三代大統領トマス・ジェファソン（Thomas Jefferson, 1743-1826（在職 1801-09））の田園主義的思想の核をなすのは、農夫こそ高貴なるものという考えであった。フィッツジェラルドのジェファソンへの親炙は、1931 年のインタビューにおける「心情的にはジェファソン的民主党員であり幾分かは理想において共産主義者でもある」（Gervais 118）という発言にも確認できる。

ジェファソンにとって農民は「『最も価値ある市民』であり『最も活発で独立心に富み、最も高潔』」（西川 53）な存在であった。マークスはジェファソンは「農本主義者（agrarian）」というより「田園主義的（pastoral）」（125）と呼ばれるべきとする。マークスがジェファソンを論じる *The Machine in the Garden* 3 章では Noble Savage 像の数々（88, 101, 133, 135, 213）とともに、農業の都会に対する優越が論じられる（99）[1]。上掲のマークスの議論に則るならば、『ギャツビー』においてその高貴たる血筋は、“shiftless and unsuccessful farm people”（104）の息子

[1] しかし同時にジェファソンは「完全な農本主義者というわけではなかった」（西川 53）のであり、「高貴な農夫（noble husbandman）は『想像上のみ』の国に住まいするのである」（Marx 135）といったジェファソンの現実主義を見落としてはならないだろう。

であったギャツビーただひとりである。「真のアメリカ人は耕作者（ploughman）である」（Marx 130）というジェファソンの価値観はギャツビーの出自の正統性を保証するものともなろう。

２．人種主義・古典・〈内戦〉

そしてジェファソンから 100 年経った 1920 年代アメリカにおいて、高貴さが再び問題となったのは人種主義の文脈においてである。作中早々第一章においてトムが言及する Goddard なる人物の著作 *The Rise of the Coloured Empires* はロースロップ・ストダード（Lorthrop Stoddard, 1883-1950）の *The Rising Tide of Color: Against White World-Supremacy*（1920）への引喩である [2]。ストダードは同書において、「ノルディック人同士の内戦（a Nordic civil war）」（183）によって高貴なノルディックが死んでしまったという論を展開する。ヴァージルの『牧歌』『農耕詩』において「内戦（civil wars）」（Briggs 232）による荒廃を牧人らは嘆くが、その内戦のモチーフはふたたび、20 世紀初頭の人種主義言説、ノルディシズム＝北方系白人至上主義の論理に見出されるのである。

フィッツジェラルドがローマ古典にどれほど親しんでいたか明らかな実証的研究はまだ未開拓の部分が多いが、半自伝的デビュー作『楽園のこちら側』（*This Side of Paradise*, 1920）の主人公エイモリーの reading list を重ねて解釈することはよく行われてきている。ブリッグズはフィッツジェラルドがペトロニウスを読んでいたことを、作家とエイモリーを重ねることで議論の前提とし（229）、ギャツビーをアメリカのトリマルキオとするよりも、フィッツジェラルド自らが「アメリカのペトロニウス」（231）になりたかったのではないかと論じるのである [3]。

The Great Gatsby に落ち着くまでの “Trimalchio” “Trimalchio at West Egg” という二つの書名案の存在には、サテュリコンが風刺した古代ローマと 1920 年代において既に意識されていた「文明の爛熟（ripe civilization）」のアナロジーがあるとブリッグズは論じる（Briggs 229）。ブリッグズは加えて、古典における主要モチーフのひとつである〈地下の冥府〉としての「灰の谷」、マートル描写におけるホメロスのフレージングの影響、『イリアド』や『アエネーイス』のパロディとしての 4 章冒頭のパーティ客リストを論じ、父の出現においてはイリアドにおけるプリアムによる息子ヘクトルの遺体奪取を見て取る（231）。

そして「戦と栄光への長い旅路の果ての、異国の土地での新しい暮らし」（Briggs 231）という共通点を持ってギャツビーとアエネーアスは結ばれる（231）。アエネーアスはトロイの勇士でアフロディテ（ヴィーナス）とアンキセス（トロイの王子、脚なえの罰を受ける）の息子、古代ローマの建国者である。ギャツビーがアフロディテの息子ならば、アフロディテの神木マートル（加藤 384）の名を持つマートルの息子ということも出来る。となれば、「灰の谷」に住む肉感的な愛人女性というミソジニー喚起と紙一重のイメジャリにそぐわぬ名を持つマー

---

[2] 知能テストの開発・普及に携わった Henry H. Goddard（1866-1957）への引喩を指摘する研究もある。

[3] ギャツビー』におけるローマ古典の影響・引喩についてはほかに MacKendrick、Endres、Sklenar、Briggs “The Ur-Gatsby” などを参照。

トル・ウィルソンとギャツビーとの親和性についての議論も可能となるだろう[4]。

ニックについてもブリッグズの古典の読み込みは行われる。ニックの価値観は、初代ローマ皇帝アウグストゥスの価値観を体現する農耕詩の「農夫（farmers）」とアナロジーをなすというのである（232）。なお『農耕詩』（*Georigcs*）については、フィッツジェラルドは同書をウィラ・キャザーの『マイ・アントニーア』（*My Antonia,* 1918）経由で読んだらしい（232）。

『農耕詩』においてヴァージルは「ヘシオドスの『仕事と憩い』の模倣（imitation）から書き起こす」（Briggs 232）のであり、かつて働かなくてよい黄金時代があったが堕落のため、銀、ブロンズ、「英雄時代」、そして現在の鉄の時代になったというその流れを踏襲している。この金から鉄への流れは『アエネーイス』8 歌 326 行（小川訳 367）にも示されるものであり、西欧文芸の基盤をなす事項と言えよう。〈過去への憧憬〉は、ヴァージルからさらにさかのぼって紀元前 8 世紀のヘシオドスまで、そして『ギャツビー』にも映し出されるのである。なおこのヘシオドスに始まる黄金から銀、「英雄」そして現在の鉄という時系列表象は、最初期の短編「カットグラスの鉢」（“The Cut-Glass Bowl,”1920）の冒頭一文 “There was a rough stone age and a smooth stone age and a bronze age and many years afterward a cut-glass age”（87）に、そのパロディを見ることができよう。

ヴァージルによれば黄金の過去への回帰は斜陽の社会にあってなお勤勉に plowing、farming につとめることによってのみなされる。これはジェファソンの高貴なる農民像とも重なる部分もあろう。そして「地上に育つすべてのもの、とりわけ人間の魂は、常に自然の法に敬意と注意を払うことなしには、腐敗する傾向がある」（Briggs 233）がゆえにその労働は永遠に続くものとなる。『ギャツビー』の最終場面は『マイ・アントニーア』やジョゼフ・コンラッド『青春』（*Youth,* 1902）にも似ているが（233）、最も似ているのはヴァージルの農耕詩 1 歌（小川 88）であり、ヴァージルの援用でギャツビーは「自身のプラトン的出産」（234）をなしえたとブリッグズは結論するのである[5]。

３．楽園の「再」発見

『ギャツビー』第二章、マートルのアパートメントでニックが手に取る『ペテロと呼ばれしシモン』（*Simon Called Peter,* 1921）は英国作家ロバート・キーブル（Robert Keable, 1887-1927）による 1921 年発刊のベストセラーである。1924 年 7 月までにアメリカでは 88 刷を数えたという（Bruccoli, ed. *Gatsby* 186）。イギリスの聖職者ピーター・グラハムが実質上の婚約者ヒルダを残してノルマンディの戦地でジュリーと恋に落ちるも、戦争の悲惨をまのあたりにしながら神への懐疑をふかめるなか彼女との仲も破綻するという物語である。

---

[4] ギャツビーとマートルの共通性については越間将平氏が以下の発表において指摘している。「“I'm sorry Myrtle is better than Daisy”」—『グレート・ギャツビー』におけるマートル・ウィルソンについて」平成 27 年度龍谷大学英語英米文学会総会・研究発表会。於龍谷大学大宮キャンパス、2015 年 9 月 20 日。

[5]『ギャツビー』のエンディングと他作家・他作品との類似については H・G・ウェルズ（H. G. Wells, 1866-1946）『トーノ・バンゲイ』（*Tono Bungay,* 1909）との類似を指摘する研究もある。Edwards 184 参照。

本稿で注目したいのは『ペテロと呼ばれしシモン』中で主人公グラハムが認識するノルマンディの美しさである。それは深い森、芽吹く樹々花咲く林檎畠の美しさであり、そこは大文字で Paradise と記される（82）。もちろん彼は英国人でありアメリカ人ではないことに注意が必要であろう。しかし〈楽園発見〉のモチーフはヘンリー・ナッシュ・スミス（Henry Nash Smith, 1906-86）の *Virgin Land: The American West as Symbol and Myth*（1950）やマークスの *The Machine in the Garden* でも論じられるようにアメリカ文学における深層をなすものであることに鑑みれば、第一次世界大戦を経たフィッツジェラルドを含む言語空間において描かれる〈美しきノルマンディ〉は、「復楽園（paradise regained）」（アメリカを paradise regained とみなすエリザベス朝の風潮：Marx 36）の様相を呈していると思われるのである。

『ギャツビー』冒頭において読者は、持ち主も住人もわからないままノルマンディ市庁舎のイミテーションたる建造物（ギャツビー邸）を呈示される。それは「『歴史』熱」（the “period” craze）のなか「一家を創設する（Found a Family）」（93）という封建時代的・アナクロニスティックな情熱に憑かれた前の所有者の手になるものであった。『ギャツビー』は 1925 年発刊であるが、ロスト・ジェネレーションをも生み出した未曽有の体験第一次世界大戦への参戦とくにフランスでの従軍経験を経て、〈アメリカ人〉は（ベストセラー『ペテロと呼ばれしシモン』の主人公グラハム同様に）中世やノルマンディの森（Smith 296-97）つまりは原初的楽園のイメージに至る〈自然〉を再発見したのではないか。そしてそれらの再発見は必然的にアナクロニズムを稼動させることとなるのである。

4．フロンティア・ラインとフロント・ライン

フロンティア・ラインが消滅し、全国がすべて開拓済みとなった 1890 年代がギャツビーとニックの誕生した時期である。そして 1920 年代、生産業から数字のみで利益を上げる株の時代が爛熟する。その合間に第一次世界大戦が勃発した。フィッツジェラルドにとって第一次世界大戦への参戦体験の欠如は〈ヒーロー〉になり損ねた痛恨事であった。大戦においてはフロンティア・ラインが消滅したのちも、それまでの過去を抹消し「貴族（patrician）」（Meredith 48）になれる機会を提供する「前線（frontline）」というもう一つの〈最前線〉があったのである。大戦はフロンティア・ラインの消滅したアメリカから大戦に出征した兵士たちに、あらたなフロンティアを提供したもいえよう。

フロンティア・ラインの消滅を宣言したフレデリック・ジャクソン・ターナー（Frederick Jackson Turner, 1861-1932）にとってフロンティアとは「野蛮と文明の出会う場所」（Smith 251）であった。この点においてフロンティアは〈混淆と予期せぬ事物の発生する場所〉ともいえよう。『ギャツビー』においてはギャツビーの育ての親にして「開拓時代の放蕩者（the pioneer debauchee）」たるダン・コーディが東海岸に持ち込んだ「フロンティアの売春宿と酒場の野蛮な暴力」（106）が記される。19 世紀後半のネヴァダやモンタナの銀鉱銅鉱で富を築いたコーディは、西漸運動末期に東部の都市部へ戻ったと考えられるが、この西部と東部の混淆たるコ

ーディが「マントノン夫人たる」(107) エラ･ケインによってふたたび放浪の旅へと送り出され、スペリオル湖のリトル・ガール湾にかかった一点において、〈超人〉ジェイ・ギャツビーが生まれたのである[6]。ギャツビーの〈父〉のひとりコーディのまとう東西南北のヴェクトルの交錯は、西漸運動が時系列と対応していた 19 世紀を背景として、上述のアナクロニズムと軌を一にするものであろう。

七章においてジョージ・ウィルソン（彼の名の原義が農夫であることにも注意したい）は妻を連れての「西部移住（to go west)」(130）の案を披瀝するが、高橋の指摘するように 1920 年代にあって逃避行としての西部行きはアナクロニズムに過ぎないのであり、その失敗は必然といえよう[7]。またすでに多くの研究が触れているウィルソンの「徒歩（wal[k])」(168）によるギャツビー邸探索という、モーターライゼイションの時代にあってのアナクロニズムにも注意したい。

おわりに

パロディの発生には時間差が必要である。ヘシオドスにおける黄金時代から鉄の時代までのモチーフが 1920 年の「カットグラスの鉢」冒頭においてカットグラスの時代に変容する。フロンティア・ラインが消滅して新たな開拓地のもはや存在しない 1890 年以降に生まれたギャツビーやニック、そしてフィッツジェラルドにとっては第一次世界大戦の「前線（the front)」があらたなセルフ・メイドの可能性を拓く場所であった。そしてその第一次世界大戦においてなお、「フロント」に至ることができなかったフィッツジェラルドは大戦後、繁栄の 1920 年代において、直近の大戦参戦によってアメリカ人に〈発見〉されたノルマンディの自然美のモチーフを通して、マークスが論じるようなアメリカ文学におけるパストラリズムの系譜を、『ギャツビー』に盛り込んだのではないか。そしてそれは「敗色覆いがたいフットボールの試合」においてなお「劇的な転換」を求めるトム・ブキャナンの「永遠のたゆたい」(10）とはしなくも響きあうような、アナクロニズムにアナクロニズムを重ねて自らのアイデンティティを築こうとするフィッツジェラルドの美しくも切ない創作姿勢なのである。

＊本稿は 2017 年 1 月 25 日国際基督教大学教養学部（東京都三鷹市）にて、大西直樹氏（同大）の講義にて行ったゲスト講義原稿に大幅な修正・加筆を行ったものである。

[6] 『夜はやさし』におけるニコルの超人性（モンスター性）とアメリカ性については千代田（2017）参照。
[7] 高橋美知子「ウィルソン夫妻と灰の谷―都市と郊外の狭間を読む―」シンポジウム「反都市化から読み解くアメリカ文学」日本英文学会九州支部第 71 回大会、於九州女子大学 2018 年 10 月 20 日。

参考文献

Barbour, Brian M. “Two American Dreams in Conflict.” Ed. Claudia Johnson. *Class Conflict in F. Scott Fitzgerald’s The Great Gatsby.* Detroit: Greenhaven Press, 2008. 67-72.

Briggs, Ward. “Petronius and Virgil in *The Great Gatsby.” International Journal of the Classical Tradition* 6.2（1999）: 226-235.

---. “The Ur-*Gatsby*.” *International Journal of the Classical Tradition* 6.4（2000）: 577-84.

Edwards, Owen Dudley. “The Lost Teigueen: F. Scott Fitzgerald’s Ethics and Ethnicity.” Ed. A. Robert Lee. *Scott Fitzgerald: The Promises of Life.* London: Vision Press, 1989. 181-214.

Endres, Nikolai. “Petronius in West Egg: The Satyricon and *The Great Gatsby.” The F. Scott Fitzgerald Review* 7（2009）: 65-79.

Fitzgerald, F. Scott. “The Cut-Glass Bowl.” Ed. James L. W. West III. *The Cambridge Edition of the Works of F. Scott Fitzgerald: Flappers and Philosophers.* Cambridge: Cambridge UP, 2000. 87-107.

---. *The Great* Gatsby. 1925. New York: Scribner, 1995.

---. *The Great Gatsby.* 1925. Ed. Matthew J. Bruccoli. *The Cambridge Edition of the Works of F. Scott Fitzgerald: The Great Gatsby.* Cambridge: Cambridge UP, 1991.

Keable, Robert. *Simon Called Peter.* 1921. Teddindton, Middlesex: The Echo Library, 2007.

MacKendrick, Paul L. *“The Great Gatsby* and Trimalchio.*” The Classical Journal* 45.7（1950）: 307-314.

Marx, Leo. *The Machine in the Garden: Technology and the Pastoral Ideal in America.* Oxford and New York: Oxford UP, 1964.

Meredith, James H. “World War I and Class.*” Class Conflict in F. Scott Fitzgerald’s The Great Gatsby.* 45-52.

Moreland, Kim. *The Medievalist Impulse in American Literature: Twain, Adams, Fitzgerald, and Hemingway.* Charlottesville and London: UP of Virginia, 1996.

Pendleton, A. Thomas. *I’m Sorry about the Clock: Chronology, Composition, and Narrative Technique in* The Great Gatsby. Selinsgrove: Susquehanna UP, 1993.

Sklenar, R. “Anti-Petronian Elements *in The Great Gatsby.” The F. Scott Fitzgerald Review* 6（2007-2008）: 121-128.

Stoddard, Lorthrop. *The Rising Tide of Color: Against White-World Supremacy.* 1920. Brighton, Sussex: Historical Review Press, 1981.

Turner, Frederick Jackson. “The Significance of the Frontier in American History.” 1893. http://nationalhumanitiescenter.org/pds/gilded/empire/text1/turner.pdf#search=%27turner+frontier+frederick%27（Accessed 23 January 2017.）

ウェルギリウス『アエネーイス』岡道男・高橋宏幸訳、京都大学出版会、2001.

---.『牧歌 / 農耕詩』小川正廣訳、京都大学学術出版会、2004.

加藤憲市『英米文学植物民俗誌』富山房、1976.

千代田夏夫「*Tender Is the Night* 試論―モンスターとしてのニコルとアメリカ表象」『鹿児島大学教育学部研究紀要』第 68 巻（2017）、157-68.

西川秀和『トマス・ジェファソン伝記辞典』大学教育出版、2014.

平石貴樹「『かれらは不注意な人たちだった』－『偉大なギャツビー』再考（上）、（下）」『英語青年』第 143 巻第 1 号（1997）、14-16；第 2 号（1997）、11-13.